茨木市立　庄栄小学校　学力・体力向上ジャンプアップ計画

平成 27 年 10 月作成

1　今年度の結果と取り組みについて

（1）全国学力・学習状況調査

○●国語●○

国語A

（領域ごと）

①話すこと・聞くこと
課題が残る結果であった。

②書くこと
やや課題が残る結果であった。

③読むこと
課題が残る結果であった。

④言語事項
やや課題が残る結果であった。

⑤関心・意欲・態度
特に課題は認められなかった。

（問題形式）

①選択式
課題が残る結果であった。

②短答式
やや課題が残る結果であった。

③記述式
特に課題は認められなかった。

（無解答率）
やや課題が残る結果であった。

（その他）

・「○○が、○○は」というかたちが主語ということは理解しているが、「ぼく」や「妹」などの「人物」が文章に出てくれば、それ自体が「主語」と思っている児童が多い。述語については、「何が」「どうした」「どんなだ」の違いが理解できていない。

国語B

（領域ごと）

①話すこと・聞くこと
特に課題は認められなかった。

②書くこと
課題が残る結果であった。

③読むこと
課題が残る結果であった。

④言語事項
特に課題は認められなかった。

⑤関心・意欲・態度
特に課題は認められなかった。

（問題形式）

①選択式
課題が残る結果であった。

②短答式
課題が残る結果であった。

③記述式
課題が残る結果であった。

（無解答率）
課題が残る結果であった。

（その他）

・長文を最後まで読みきれず、一部だけを切り取って判断している解答が多い。
・問いの意味が分かっていないためか、かなり正答率が低い。また無回答率も高い。

分析

長文を根気よく最後まで読み解く力がついていないため、文章から必要な情報を選び取ることができていないことが多いと思われる。ふだんの授業において「読解力」を身につける指導をする必要がある。また、詩など創造的なものを読み解くことが苦手な傾向があるといえる。

授業アンケートからは「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり書いたりしている」とと答えた児童の割合が平均を下回る。日常的に「自分の考えを書く・話す」作業や技術を取り入れるなどの工夫をする必要がある。しかし、「国語の勉強は大切で将来社会に出たときに役に立つ」と思っている児童の割合は平均を上回っており、学習に対して決してうしろむきではなく、学習意欲の持続や指導の工夫・改善の取り組みを継続していく。

○●算数・数学●○

算数・数学A

（領域ごと）

①数と計算

課題が残る結果であった。

②量と測定

課題が残る結果であった。

③図形

課題が残る結果であった。

④数量関係

やや課題が残る結果であった。

（問題形式）

①択式

課題が残る結果であった。

②短答式

課題が残る結果であった。

③記述式

特に課題は認められなかった。

（無解答率）

やや課題が残る結果であった。

（その他）

・今後も、基本的な知識を定着させるべく、日々の授業力向上はもちろんのこと、家庭学習の定着も図っていくことが必要である。

算数・数学B

（領域ごと）

①数と計算

課題が残る結果であった。

②量と測定

概ね良好な結果であった。

③図形

やや課題が残る結果であった。

④数量関係

やや課題が残る結果であった。

（問題形式）

①選択式

課題が残る結果であった。

②短答式

概ね良好な結果であった。

③記述式

やや課題が残る結果であった。

（無解答率）

やや課題が残る結果であった。

（その他）

・実際の地図や絵、書き方が具体的に示されていて、考える順番も文章化されていたら、正解を求めやすい傾向がある。

・答えを導きやすそうな問題であっても、そのわけを説明し文章化するとなると苦手なようである。

分析

自分で筋道を立てて、問題解決する力が乏しい傾向がある。

答えを導き出すことができていても、その考えにいたる理由等を説明したり、文章に書いたりすることは、苦手である。

今後は、授業のなかで、答えを出すだけでなく、課題解決にいたる道筋や、その根拠等を、文章に書いたり、言葉にしたりするような活動を、意識して取り入れる必要を感じる。

○●　理科　●○

理科
（区分）
①物質
課題が残る結果であった。

②エネルギー
課題が残る結果であった。

③生命
課題が残る結果であった。

④地球
やや課題が残る結果であった。

（問題形式）
①　択式
やや課題が残る結果であった。

②短答式
課題が残る結果であった。

③記述式
課題が残る結果であった。

（無解答率）
やや課題が残る結果であった。

（その他）

・生活経験と理科がつながっていない。
・無回答率が高く、実験器具の名前をきかれるといった、基本的な問題であっても、4割の児童が無回答している。

分析
問題文・図・グラフから読み取る問題は、最後の問題までたどり着くだけの読解力が身についていない。理科だけでなく社会科などの授業において図やグラフの読み取りが出来るようにしたい。日ごろから見通しや目的意識をもった観察・実験を行い、結果を考察するという過程を大切にしたい。
授業者は学習の導入で「不思議だな調べてみたいな」と思えるような手立てを講じる必要がある。教科書に載っている基本的なことを、これまで学習してきた内容や生活経験・実体験を基にして、何らかの予想が立てられる授業を仕組むことが大切である。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

・平均正答率は全体的に低下した。
・無回答率は全体的に高い。
・筋道を立てて、問題解決する力が弱い傾向がみられる。

学力高位層と学力低位層についての分析

・ここ数年、縮まっていた学力高位層と低位層の開きが今年度は広がってしまう結果となった。テスト平均 0～40%の層のポイントが大幅に増加し、その分高位層のポイントが下がってしまった。低位層の児童を少しでも中位層まで押し上げていく必要がある。

○●取り組み●○

学力向上に関する取り組み

① 授業改善を図る。
・授業研究(年 3 回の授業研究においては、子どもの実態から事前に目標を明確にして、指導案検討を行い、その後の研究会の充実をはかる。
研究授業、研修会、研究交流会
・授業のなかで、自分の意見や考えを述べたりする活動をより多く取り入れる。
・「コミュニケーション能力の育成」を念頭に、「聞く、話す」活動が充実するような取り組みを、日常的に続けていく

② 基礎的な学力育成を図る。
・毎日の家庭学習を習慣づけ、家庭にも協力をよびかける。
・夏休み中の学習会や休憩時の個別指導を続け、きめ細やかな指導を進める。
・問題解決学習を中心として、意欲を喚起し楽しい思える授業づくりを進める。

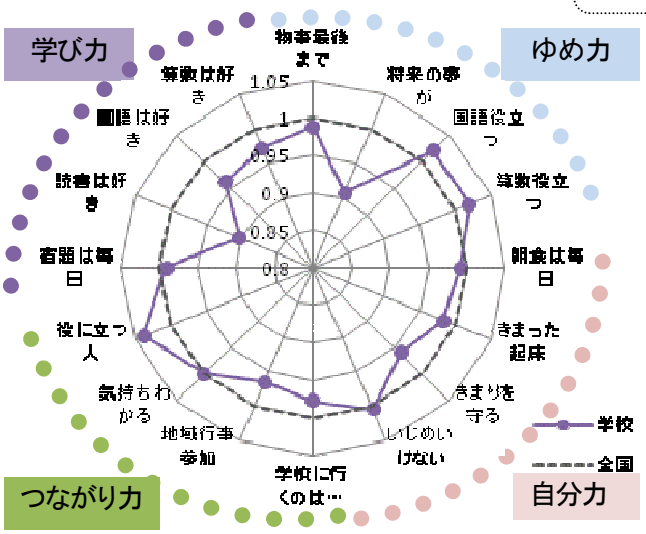
③ 読書活動の充実や表現力を高める活動の推進
・読書タイムの実施と図書ボランティアによる読み聞かせ
・図書専門支援員との連携のもと、足を運びたくなる図書室の環境整備を行うと同時に、各教科と連携した、読み物の紹介等、「本を手に取ろうとする」取り組みを推進していく。

○●子どもたちに育みたい力●○

今年度の結果

基礎資料⑦から
貼り付ける

これまでの推移



分析

本校の児童の家庭での生活習慣を見る限り、朝食をきちんと摂り、毎日だいたい同じ時刻に寝起きしている児童がほとんどである。しかしその一方で、これらのことがきちんと守れていない児童の数が全国や府に比べて多いことも気になる点である。

「難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦していますか。」という設問に対して「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる。」と回答した児童が特に少ない傾向にある。学力テスト等においても、無回答率がいつもの年度より多いこともあわせて考えると、このことは十分納得できる。設問に対しても、「どちらかといえば、当てはまる。」という回答をする児童が多いことでも、自信のなさがうかがえる。今後の取り組みのなかでは、前向きにいろんなことに挑戦する場面を、指導者が意図的に作っていくことが必要だと感じる。

「人の役に立つ人間になりたいと思うか」とい設問に対して、９５パーセント以上の児童が「そう思う。」「どちらかといえばそう思う」と答えている。このことは、本校の児童が低学年に接する姿にも現れている。

国算理とも、「この勉強は将来役立つ、大切」と認識している児童が多くいる一方で、それらの教科が「好き、楽しい」と感じる児童が少ない。指導者は児童の意欲や関心を育てられるように、教材研究する必要性を求められている。

取り組み

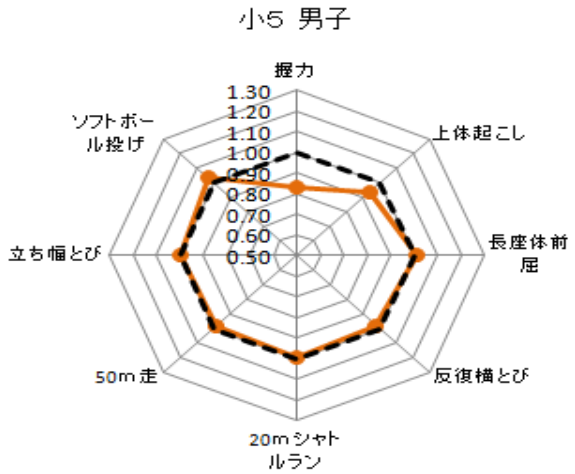
・よいところを認め励まし、自信を持たせるような取り組みを進めていく必要がある。
今後は児童の「自己有用感」を充実させる取り組みが必要だと感じる。たとえば、児童会活動の充実や、きょうだい学級の取り組みにおいて、「人の役に立ちたい」と思う児童の意識を行動にうつさせ、それを全校の児童や指導者が認めていくことができるようにしていきたい。

・児童会を中心とした異学年の交流を今後もさかんにし人間関係のつながりを深める。

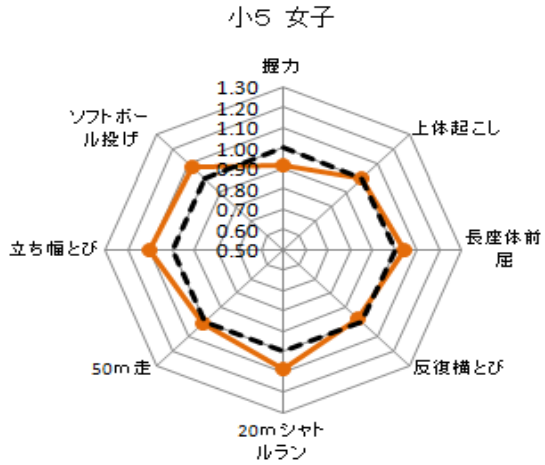
（2）全国体力・運動能力、生活習慣調査

○●体力●○

男子（小5　中2）



女子（小5　中2）



分析

・反復横跳びは測定の間違いが予想されるが男女ともにほぼ、全国平均に近い結果となった。測定方法の徹底をテスト以前に徹底するとともに、体育館の床がすべるのでそれに配慮した対応を講じる必要がある。
・50m は男女ともに全国平均並みの結果を残すことができた。走ることへの意欲が高く、休み時間等を活用して、リレーのバトン練習を積極的に行う姿もよく見受けられる。
・握力は男女ともに全国平均を大きく下回る結果になった。本校においては一番の課題の残る種目となっている。原因は、つかんだり握るといった動作が減少傾向にあることがあげられる。休み時間等を見ていても鉄棒場に児童が集まる姿はあまりみうけられない。普段の授業においては、うんていや上り棒、鉄棒などを活用し、より握る動作を取り入れていく必要性がある。
・ソフトボール投げは男女ともに全国平均を大きく上回る結果を残した。本校においては低学年期から授業や休み時間等にドッジボールや手打ち野球、キックベース取り入れたり、遊ぶ姿が男女ともにみられる。日ごろから投げる動作を繰り返すことで正しいホームを身につけボールを遠くへ投げる感覚をみにつけることができる。
・20m シャトルランは男女ともに全国平均を上回る結果になった。秋口にマラソン大会を実施し、体育の授業においても持久走やペース走を行っているが、今後も継続していく。

取り組み

・体育の授業をはじめとして、様々な運動を経験し、動きを身につけられるようにする。
・行事の体操などに茨木っ子体操を取り入れて普及を図る。
・学級毎にボール、大縄を配り休み時間に外で遊ぶことができる環境を整える。
・長距離を走ることが苦手な子どもが多いので、長く走り続けることを楽しみ、好きになれるような取り組みを実施する。
・自分の身体のことを知るために、養護教諭に指導を受けたり、体作りのために食育に関わる指導を栄養教諭に受けることを継続する。

２　３年間の計画

（各校）　　（ブロック共通）

	学力向上	体力向上	中学校ブロック連携
目標	すべての教育活動を通して豊かな表現力を育てる。	いろいろな運動を経験し、楽しむ心を育てる。	**保幼小中で１８歳時点でのめざす子ども像を共通理解し、子どもの発達段階に合わせた実践を行う。**
平成26年度	～３年間を通して～ ①　授業改善を図る。 ・授業研究、研究授業、研修会、研究交流会 パワーアップ研修 ②　基礎的な学力育成を図る。 ③　読書活動の充実や表現力を高める活動の推進 ・読書タイムの実施と図書ボランティアによる読み聞かせ ・庄栄図書館との連携 ④　キャリア教育の推進を図る。 ・様々な人との出会いと交流の場をつくる。 ・小中連携の充実を図る。 ⑤　基本的な生活習慣づくりのため ・家庭との連携を図る。	・茨木っ子運動の普及 ・マラソンタイムの実施 ・いろいろな運動経験ができる体育の授業作り。 ・体育用具の整備。 ・自主研修会をする。	◎それぞれの発達段階を理解するために ・小中合同授業研 ・行事の交流と授業の参観 ・授業研・公開保育などへの参加 ・クラブ活動の交流 ・夏季合同研 ・授業スタンダードの確立
平成27年度	２６年度の反省を基にテーマを設定する 「自分の思いを伝えることができるようにコミュニケーション能力を高める。」 ・授業研究 ・ペア、グループ学習。全体交流 ・話し合い活動の充実。 ・自分の考えを整理し、発表する。 ・獲得した手立てを使って自分の考えを表現する。	・研修会の実施 ・環境整備 ・授業に関わる資料の収集 ・研究授業の実施	◎学力向上につながる授業づくり ・三島中ブロック保幼小中連携カリキュラムの作成 ・保幼小中連携会議の実施 ・中学校教員による出前授業の実施
平成28年度	２６・２７年度の反省を基にテーマを設定する 「　　」 ・授業研究		◎三校合同で授業づくりの改善・実施 ・三島中ブロック保幼小中連携カリキュラム作成実施